

## 吉永小百合さんと「寅さん」

写真は「寅さん絵入りはがきセット」から。かなり前に買ったが、葉書として使わず大切に持っている。「寅さん」シリーズの映画ポスターを絵葉書にしたものだ。写真上は1972年8月上映の第9作「柴又慕情」、下が74年8月上映13作「寅次郎恋やつれ」である。この頃は大阪で大学院「浪人」時代、そして修士課程で学んでいた。この映画を何回見たことであろう？

いずれも大好きな女優・吉永小百合さんがマドンナ役だ。前から気になっていたのが、吉永小百合さんの表情が二つの作品で大きく違っていることだ。たまたま図書館で見つけた日本図書センター刊行「人間の記録」122（2000年）は「夢の途」という副題がついた吉永小百合さんである。その3章「脱出・結婚」から、その理由がやっと分かった。



声を失った私を元気づけてくれた人と結婚。「私は、積み積み積もった精神的な疲労を取り除くために、彼をとり、過去を捨てよう」と決心しました。アイドルであった私、スターと呼ばれた自分を捨てて、もう一度人間としてのスタートラインに立ち、新しい一歩を踏み出す……。1973年の夏、新しい生活が始まりました。

どこに行っても、何をしてもわからないことだらけでしたが、一方で、何もかもが私の目には新鮮に映りました。そういう生活の中で、私は少しずつ精神的な疲れを癒すことができるようになり、声の調子も次第に回復していきました。そして、短い1年の休暇が過ぎ、私は仕事を再開しました。『男はつらいよ』にも歌子役でゲスト出演しました。前作の『柴又慕情』で歌子は親の反対を押し切り、名もない陶芸家と結婚したのですが、『寅次郎恋やつれ』は、その夫と死別してしまった歌子と、寅さんの再会からドラマが始まるのです。新婚の私にとっては、ずいぶん皮肉な設定だと苦笑しました。

混乱の中で結婚し、慣れない家事に没頭し、すっかり所帯やつれした私が、スクリーンに写し出され、われながら驚きました。」



(2016年3月4日)